# 接班城村

私たち釜石市民は、巨大津波や第二次世界大戦中に艦砲射撃を受けるなど、過去に多くの試練に直面し、これを乗り越えてきた歴史をもちます。 東日本大震災では壊滅的な被害を受けましたが、どんな困難にも屈することのない「撓まず屈せず」(不撓不屈)の精神で、復旧・復興に取り組んでいます。



#### 2011.3.11 を経験した釜石市民より、未来のあなたへ

# 10 のメッセージ

わたしたちのまち釜石は、三陸の雄大な自然に抱かれた美しいまちです。 しかし、あの東日本大震災により、多くの命が奪われ、わたしたちの暮らしは一変しました。 あの悲しみを二度と繰り返すことがないよう、 未来の命を守るため私たちから 10 のメッセージを伝えます。

- 大きな揺れや長い揺れを感じたら あなたは、とにかく 高いところへ 逃げてください
- 2 たとえ過去の津波がいま、あなたのいる場所まで来たことがなくてもあなたは逃げてください
- 3 100回逃げて、100回来なくても 101回目も必ず 逃げてください
- 4 あなたが率先して逃げれば 多くの人の避難を促し 命を救うことになるでしょう
- 5 相手は自然。 いつ、どこまでどれほど 大きな津波が来るか だれにもわからないのです

- 6 家族を信じて みなが「命てんでんこ」で 逃げてください 自分の命は自分で守るしかないのです
- 7 地震がおきたら 家族が別々の場所にいても 探したり 戻ってはいけません
- 8 もし、大切な人の命を守れなくても 決して自分を 責めないでください
- 9 やがて平穏な日常が戻ったとき あなたはきっと気づくでしょう 自分は決して一人ではないことを 多くの人に支えられて生きていることを
- 10 未来のだれかが同じ思いをしないようにいま、あなたにできること。 「避難を続けること」 「備えること」



釜石には、いまも海の恵みを存分に享受できる豊かな暮らしがある

# この震災を忘れず、未来に伝えるために

## 釜石市の概要と被災状況

#### 「鉄と魚のまち」釜石

釜石市は岩手県の南東部、三陸復興国立公園のほぼ中央に位置し、海洋の影響と地理的条件から四季を通じて温暖なまちです。海岸は典型的なリアス式海岸で、美しい景観で知られます。また釜石港は、親潮と黒潮が交錯する世界三大漁場の1つである三陸漁場の中心港であり、漁業、養殖業が盛んに行われています。一方、1857(安政4)年、日本で初めて洋式高炉による連続的に、大量に鉄を生産することが可能となり、近代製鉄業発祥の地としてその後も、製鉄業と共に発展してきました(橋野鉄鉱山=世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産)。このように、釜石市は「鉄と魚のまち」として発展してきました。

#### 三陸沿岸は津波の常襲地

海はさまざまな恵みをもたらす一方、過去に多くの津波被害をもたらしました。なかでも1896(明治29)年に発生したマグニチュード8.2(推定)の「明治三陸地震」では、津波により釜石町(当時)の約6割の方が亡くなりました。1933(昭和8)年に発生したマグニチュード8.1の「昭和三陸地震」では、地震による被害は少なかったにもかかわらず、津波により164名が亡くなりました(行方

不明240名)。こうした悲劇を繰り返さないため、沿岸各地では津波記念碑が建てられ、数多くの伝承が残されるなど、津波の恐ろしさを後世に伝える努力がなされてきまし



明治の大津波の惨況を伝える絵図

た。また、2009 (平成 21) 年、世界最大水深から立ち上げられた釜石港湾口防波堤も整備されるなど様々な備えに取り組んできました。

# マグニチュード 9.0 東日本大震災発生

2011 (平成 23) 年 3月11日に発生したマグニチュード 9.0 の地震による巨大津波で、再び甚大な被害となりました。過去 2 度の巨大津波とは違い、緩やかな海面上昇ながら急激な高波となり、湾口防波堤を倒壊させるほどの威力で街に迫りました。水勢は陸地に到達してからも衰えず、水はガレキを含む汚泥となって市の中心部を襲いました。市内での遡上高は最大で 32.87m にもなりました。当時の様子を市民は「大きな黒い蛇が鎌首を上げたようだった」「波というより壁だった」などと語っています。

釜石市内では、888 名の遺体が確認され、さらに 152 名が行方不明となっています(2017年3月11日 現在)。



釜石

#### 地震の概要

発生日時 2011年3月11日(金) 14:46

震源 三陸沖(牡鹿半島の東南東 130km 付近) 規模・震度 マグニチュード 9.0・震度 6 弱(釜石市内)

釜石市の被害状況 (2017年3月11日現在)

#### ①人的被害

●死亡者数(市民) : 1,063 人(行方不明者 152 人、関連死認定者 105 人含む)

●避難者数(最大時) : 9,883 人 内陸(市外)避難 633 人

②家屋被害

●住家数:16,182 戸のうち4,705 戸が被災(29%)(全壊:2,957 戸、大規模半壊:395 戸、半壊:304 戸、一部損壊1,049 戸)

③産業関係

●市内全事業所 : 2,396 事業所/浸水 1,382 事業所 (57.7%)●漁業関係 : 漁船 1,734 隻/被災 1,692 隻 (97.6%)



津波のあとに残された膨大ながれき (鵜住居地区・両石)

# 震災の出来事大きな被害があった鵜住居地区。この経験を忘れることはできない。

## 大きな犠牲を出した「鵜住居地区防災センター」

### ーなぜ多くの生命が失われたのかー

東日本大震災において、被害が大きかったのが、市北部の沿岸部に位置する「釜石市鵜住居地区防災センター」です。震災1年前に開所したこの施設に、震災当日、多くの住民が避難し、推定160人を超す方々が犠牲となりました。

同センターは、岩手県が示した浸水予測図では浸水しない想定でしたが、明治の津波で浸水したと思わ

れることから、津波災害の避難場 所ではありませんでした。しかし、 施設の名称を「防災センター」とし たことや、震災前に地域でこの施設 を利用した津波避難訓練が行われ ていたことなどから、一部の住民の 間に、津波災害の避難場所である との思い込みが生じ、震災当日、多 くの住民が避難してきました。

市は調査委員会を設置し、「事態

の回避は可能であった」とする報告 書を取りまとめました。このような悲劇を二度と繰り返さないために、今後、市と住民の連携のもとで、市職員の危機管理意識の向上、組織としての危機管理体制の強化、住民の防災意識の啓発などの取り組みを進めます。



中心に映っているのが鵜住居地区防災センター (鵜住居町)



「鵜住居地区防災センター」これまでの防災対策が十分に機能していなかったことを浮き彫りにした



東日本大震災防災センター犠牲者追悼式

## 子どもたちの命を救った「防災教育」

### 一津波から命を守る避難三原則一

震災時、放課後ですでに下校、 教室を離れていた子どももいました が、中学生が率先避難者となり、 小学生と地域の大人たちなど総勢 600人が高台を目指し津波から逃れ ることができました。

市では、震災前より防災教育を核 にした「命の教育」に取り組んでき ました。いたずらに災害を恐れるの ではなく、自然災害に対する理解を

深め、これに対応する知識や能力 を向上させたいと考えたからです。 学校で既に行われている授業の中 で、防災教育が行われるよう、子ど もの発達段階に応じたカリキュラム が工夫されました。

この教育では、「津波から命を守 る『避難三原則』|が掲げられました。 このような実践的な防災教育の積み

重ねにより、子どもたちは、自らの 判断で素早く避難し、周りの人たち の避難を促すことができました。



高台に避難した鵜住居小学校、釜石東中学校の児 童·生徒(鵜住居地区) 高村幸男氏提供



定められた避難場所が危険だったことから、小・中学生はより高台をめざして避難(鵜住居地区)

浦山文男氏提供

#### 教職員と児童・生徒の避難行動(鵜住居小学校・釜石東中学校)

#### 海抜 44m

恋の峠(国道45号)

海抜 2m

海抜 5m ございしょの里

海抜 15m やまざきデイサービス

#### 津波から命を守る避難三原則

- ◐想定にとらわれるな 津波による浸水被害を予測したハザード マップは、あくまでも想定にすぎない。
- 2 その状況下において 最善を尽くせ 自分の命を守るために、そのとき自分が できる最善のことをする。
- 3 率先避難者たれ 周りの人がどうであろうと、まず自分自身 が真っ先に避難する。

# 自然災害とともに生きる知恵「命てんでんこ」

そこに込められた先人たちの深い思いとは?

#### 津波避難の標語「命でんでんこ」

東日本大震災では、津波から命を守るには「ただちに 高台へ避難」することの重要性が再認識され、「津波て んでんこ」が注目されるようになりました。「てんでんこ」 とは、「それぞれに」「めいめいに」を意味する方言です。

釜石市の沿岸では「命てんでんこ」などと言われています。「非情な教え」と言われますが、「自分だけが助かればいい」という自分本位の教えでは決してありません。そこにはたくさんの意味(先人の思い)が込められています。

#### 基本の意味は「自分の命は自分で守る」

「命てんでんこ」の基本は「自分の命は自分で守る」という「自助」の教えです。すさまじい破壊力をもつ津波から身を守るには、一刻も早く、それぞれに、てんでんばらばらに高台に逃げるしかないからです。東日本大震災では、この教訓を生かした行動が多くの命を救いました。 釜石市の児童・生徒は、まさに「命てんでんこ」を実行して、自らの命を守りぬきました。

### 自分が逃げることで「他人の避難を促す」

「命てんでんこ」は「逃げる」知恵であると同時に、「逃がす」知恵でもあります。東日本大震災では、そのことが再確認されました。小・中学生が高台に向けて走る様子を見て、当初は避難をためらっていた地域の人たちが、あとを追うように一目散に避難を始めました。また、下校後に1人自宅にいた小学生も、自らの判断で素早く避難し、その行動がまわりの人たちの避難を促しました。

### 「互いを信頼」して、それぞれが逃げる

家族の安否がわからない状況で「命てんでんこ」などできるはずがないと思う人もいるでしょう。人として当然の心情です。しかしそれでも、多くの児童・生徒、家族が「命てんでんこ」で逃げることができたのは防災教育の賜物です。

震災前、児童・生徒への防災教育と同時に、保護者に対しても「子どもを信じて親も避難を」と伝える努力をしてきました。だからこそ、子どもは親を信じて、親も子どもを信じて、「命てんでんこ」で逃げることができました。親子、学校と保護者、雇用者と従業員…。信頼関係あってこその「命てんでんこ」です。

#### 生き延びた人の「震災後」を支える言葉

東日本大震災では多くの方が犠牲になりました。震災から月日が経っても、大切な人を失い喪失感や自責の念に苦しむ人は少なくありません。「あのとき、手を放さなければ」「なぜ、自分だけ生き残ったのか」…。そうした人々に対して「命てんでんこ」は、大災害を生き延びた人の「その後の人生」を支える言葉とも言われています。「『てんでんこ』だから、仕方がなかったのだ」と。実際「亡くなった人からのメッセージ」として受け止めている方もいました。

#### 残された課題

「命てんでんこ」は万能ではありません。自力で避難できない人をどうするかという課題が残されています。東日本大震災では、自力で避難できない人を助けようとして共倒れになったケースも少なくありませんでした。「命てんでんこ」が「哀しい教え」と言われるのは、この問題に対する答えが用意されていないからだとも言われます。生き残った私たちが、今後、考えていかなければならない問題です。



東日本大震災後に建てられた石碑 「ともかく上へ上へ逃げよ。てんで んこで逃げよ。自分を助けよ。」と 記されている。(鵜住居地区・根浜)

百年先、千年先まで、命を守るために

# 「津波から身を守る知恵」を つぎの世代に伝えたい ※4

金石市長 野田武則



#### 「語り継ぐ」ことだけでは限界がある

東日本大震災という未曾有の大災害を体験した私たちは、二度と再び悲劇を繰り返すことのないよう、震災から学んだ教訓を伝えていかなければなりません。

それは容易なことではありません。明治三陸地震や昭和三陸地震の津波を体験した先人は、その教訓を石碑や伝承として残しながらも、震災前、その教訓はすでに風化し始めていました。警報が発令されても、私たちは「どうせ、大きな津波など来ないだろう」と思うようになっていました。まして、東日本大震災のときのような巨大津波は、数百年、あるいは千年に一度と言われています。

「語り継ぐ」だけでは限界があります。世代交代が進めば、被災した直後の思いが薄れていくのは、ある意味、 当然のことだからです。

#### 避難行動や備えを「実践し続ける」

では、どうしたらいいでしょうか。それを考える大前提として、私たちは2016年に、住民の方々の体験をもとに『教訓集』『証言・記録集』を作成しまし



たが、そのことにより、重要なのは語り継ぐだけでなく、 「行動を実践し続ける」ことが不可欠であると考えました。

たとえば「揺れたらただちに高台へ避難する」という 行動を、何度も何度も実践し続けます。すると、つぎの 世代にとってはそれが「当たり前の行動」になり、生活 の中に深く浸透、定着するのではないでしょうか。避難 行動に限ったことではありません。親は子どもが避難し ていると信じ、危険を冒して「子どもを学校へ迎えに行 かない」「命てんでんこで行動する」「知識・経験・想定 にとらわれすぎない」など、『教訓集』にあるすべての 行動、備え、規範について言えることです。ひたすら実 践し続け、つぎの世代、またつぎの世代へと伝えていき たいと考えます。

#### 津波から身を守る「しかけ」を創る

一方で、災害に特化した行動や備えと実践することと は別に、津波から身を守るさまざまな「しかけ」を創る ことを、合わせて考えていくことが必要です。

震災後、被災地では防潮堤などによる防災対策が進められています。このことにより津波被害の減災は可能となるでしょう。しかし、知恵は生かされる機会がなければ、時間の経過とともに、再び風化しないとも限りません。

釜石に古くから伝わる「陣屋遊び」は、そうした「しかけ」の一例です。子どもの日に山の高台に陣地を作り、地域の人と1日を過ごす楽しいイベントです。「防災」を意識せずとも、毎年このイベントを楽しむことで、結果として避難路の整備や避難所生活の訓練につながります。 震災後、このような「しかけ」が各地で新たに生まれています。



**陣屋遊び** 高台に陣地を飾り、華やかさを競う。避難路の整備や避難所生活の訓練につながる。



なる。 **韋駄天競争** すみやかな高台避 難を促す行事。震災後に始まる避 難場所やルートの確認に役立つ。

## 災害文化の構築をめざして

避難行動や備えの実践、さまざまなしかけ、さまざまな工夫をこらすことで、いたずらに海を恐れることなく、自然の脅威と向き合いながら、自然とともに豊かに生きていきたい。本当の意味で災害に強いまち、「災害文化」を創ることをめざして、まちづくりに取り組んでいます。



# 釜石市

〒 026-8686 岩手県釜石市只越町三丁目 9 - 13 TEL 0193-22-2111 (代)

ホームページ



